

中国沿岸ピジン——その資料と背景 (上)

Umberto Ansaldo, Stephen Matthews, Geoff Smith 著

萩原亮 訳

0. 要旨

本稿では Chinese Pidgin English として知られる中国沿岸ピジン (China Coast Pidgin, CCP) の起源と構造に関する問題について再検討する。まず CCP 発展の土壌を形作った中国の貿易に関する歴史について概観し、次に入手可能な資料、特に中国語で記された教材から新たに得られたデータを紹介する。これらの資料は CCP の文法構造を考える上で新たな論拠となり、主要な基層言語としての広東語の強い影響を示唆するものである。英語で記された資料との比較によって、疑問詞疑問文において、英語で一般的な文頭に移動する疑問詞と、中国語に広く見られる移動しない疑問詞を巡って、英語的な言語変種と中国語的な言語変種の間が存在する体系的な差異が明らかとなる。本稿の結論は、CCP のシナ語派的特徴に関する議論を解決する一助となるであろう。

1. 前言

中国沿岸ピジンは、Chinese Pidgin English として知られ、種々の理由から「全てのピジンの母」と呼ばれている (Li, Matthews, & Smith 2005: 79)¹。特に、主にバイリンガルの地域住民の中で生じ、限定された場面で使用される言語体系に対して「ピジン」の名が与えられたとされる (Reinecke 1937)。また中国沿岸ピジン (以下 CCP) は、太平洋地域における、英語の語彙を使用したピジンの拡大との関係も指摘されてきた (Siegel 1990; Tryon, Mühlhäusler, & Baker 1996: 485)。CCP は一般的な英国人の心理や文学の中で固定的なイメージで見られ、嘲笑の対象となったが、中国沿岸の港に根付いた西洋商人の社会においてはリングフランカとして機能した。特に言語学及びピジン研究にとって重要な CCP の特徴は、中国人同士の実用的なコミュニケーションのために編まれた資料が存在する、ということである (Shi 1993)。

本稿では CCP 形成の背景に関して歴史的側面からの検討を行い、更に唯一にして最大の信頼できる資料であり、文法に関する情報が豊富な *Chinese-English Instructor* (『英語集全』) の注に現れる言語について体系的記述を行う。本稿の目的は、CCP の発展に関する知識を提供することであるが、この方面についてはこれまであまり言及されてこなかった。従来の先行研究では、

¹ 我々は、中国沿岸に起源を持つことを明示し、英語の変種であるという含みを持たせないために、本稿の対象である接触言語を「中国沿岸ピジン」と名付ける。

ピジンの発展に関して、基層言語論者の分析 (Shi 1991) と、英語の影響及びピジン化の普遍性に関する主張 (Baker & Mühlhäusler 1990) との間で見解が対立していた。本稿が主張するように、CCP の重要な言語変種が認められれば、後者の主張に対して強い証拠を提供できるだろう。本稿の構成は以下の通りである。第 2 章では南方中国における西洋の存在に関する歴史を紹介し、CCP が生まれた珠江デルタの状況の詳細を見る。第 3 章では現在利用可能な CCP の資料を紹介し、これまでの研究をまとめる。第 4 章では『英語集全』に見られるピジンの文法分析を行う。第 5 章では我々の発見をこれまでの CCP の研究に関連づけ、結論を記す。

2. CCP の歴史

マカオと珠江デルタの歴史は、中国で起こった東西の接触とそれによって引き起こされた言語学的現象の代表的な事例と言えるだろう。これらの東西接触の結果として、少なくとも 2 つの言語変種が 17 世紀と 18 世紀の間に生まれた。一つ目は、マカオのポルトガル人とアジア人が混在する地域において共通語となったシナ語派の特徴を持つアジア訛りのポルトガル語、Makista (マキスタ) である (Ansaldo & Matthews 2004; Ansaldo, Matthews, & Smith 2009; Ansaldo 2009)。二つ目は中国沿岸ピジン (CCP) であり、英国統治下の広東 (現在の広州) 周辺で発展した貿易言語として後に中国の他の港に伝わり、太平洋地域にまで流入した²。

2.1. 南方中国におけるイギリスとポルトガルの存在感

イギリスはポルトガルに 100 年遅れて南方中国に到着した。イギリスは明や南明 (1644~1662) と断片的に接触していたが、初期の交流は 1644~1684 年の間に起こり、その時期は新たに成立した清朝が複数の問題に悩まされている時期であった。清朝は中国西北部におけるアルタイ系諸民族との国境紛争に加え、海上貿易を禁止していた時期における、「海賊」鄭成功率いる台湾の反乱軍の対処にも手を焼いていた。そのため清朝は新たな商人たちに対しては無関心で、初期の交流における仲介人としてはマカオ人 (主にポルトガル人の祖先を持つ人々) がよく使われた。マカオ政府は中国との貿易の独占権を守るために、イギリスの活動を可能な限り制限し管理しようとした。イギリスはポルトガルの仲介に立腹し、中国と直接貿易をしようと必死だった。1685 年、勅令により広東が貿易のために開港されることになり、1699 年、イギリスは貿易のために「ファクトリー (夷館)」の建設を許された (Gunn 1996: 27)。ポルトガル語起源の *feitor* という語は、王朝の独占的な貿易に貢献する代理人を表し、15 世紀初頭からのポルトガルの商業史における象徴的な存在となった (Paviot 2005: 24)。この間における Mundy (1637) の記述によると、彼は現地住民と英語でコミュニケーションを取ろうとしたときに困難を感じたという。他の旅行者も 18 世紀半ばに至るまで現地の中国人との交流の際には英語とポルトガル

² これを示唆するものとして、*kaukau* というハワイクレオール英語は、CCP の *chow-chow*、即ち食べ物を意味する語に由来を持つことが挙げられる。

語の混合言語を使っていたと報告している（Noble 1762）。マカオが西洋商人と中国との早期の貿易において重要な役割を果たしたことは明らかである。マカオ人の子供（あるいは配偶者）の間で通訳が育ち、中国政府とポルトガルの官吏との間の仲介に特化していったが、彼らは中国語の書面語、口語どちらも堪能で、その多くは広東語と北京語のどちらも扱うことができたと考えられる。地元政府とやりとりをする者は広東語の能力が要求され、中央から来た裁判官への対応には北京語ができる者が適任であった（Boxer 1973）。この言語の運用能力によって彼らは東西貿易の通訳及び仲介の中心的存在となり、ポルトガルの経済力低下の原因となったオランダやイギリスによる貿易会社の設立後も引き続きその役割に就いていた。アジア訛りのポルトガル語は西洋商人にとってのリンガフランカとして機能しただけでなく、18世紀末まで中国人に対する最も適切なコミュニケーションの手段であった。更に、宣教師の活動に関連して、中国の言語と文化を学ぶ唯一の学校がマカオに存在していたため、ポルトガルは中国（及び日本）の文化や礼節に関する最も優れた情報源とされていた（Martino 2003; Tamburello 1983）。*Chinese Repository*（1833）には「1517年から1世紀以上もの間にわたり、中国を訪れる唯一のヨーロッパの船はポルトガルのものであり、彼らの言葉はある種、沿岸におけるリンガフランカとなっていた。」（Martino 2003: 21）という記述が見られる。最終的に、広東が開港された後も西洋商人はマカオに定期的に滞在し、特に毎年夏と秋には船の整備や書類の発行を待つ商人で街が溢れかえった（Gunn 1996: 28）。

17世紀後半からようやくイギリスが南方中国において存在感を見せ始める。その原因は、(a) 日本が鎖国したことにより、イギリスが中国との貿易に関心を寄せたこと、(b) 東インド会社等の西洋貿易の勢力が拡大したこと、(c) 中国と台湾の紛争を解決する手段として、海上貿易の航路が再開されたことである（Martino 2003）。中国とイギリスの関係の初期段階においては、英語の役割は重要なものではなかった（Martino 2003: 24）。この段階ではポルトガルの仲介が貿易の中心であっただけでなく、イギリスは17世紀末まで依然としてインドや北アメリカに目を向けていたので、中国におけるイギリスの活動は限定されたものであり、大きな存在感はなかった。この初期段階におけるイギリスと中国の間での言語接触を無視することはできないが、次の節で論じるフリント事件や「広東システム」の後に、中国沿岸ピジンのような貿易言語が本格的に発展していったと考えられる（Ansaldo 2009）。

2.2. 広東システム

広東貿易の早い時期では、通商は中国政府によって管理されており、いくつかの限定された港でのみ許されていた。そこでは西洋商人は地元の中国人商人を通じて商売を行い、中国人商人の間に賄賂が横行していた。貿易を自由化し、改善しようとする試みとして、1736～1762年の間中国に住んでいたジェームス・フリント（James Flint）という人物が、地元広東政府による賄賂の問題を解決するため天津に赴いた（Martino 2003: 32; Soothill 1925）。フリントは通訳の力

を借り、広東貿易の賄賂に関する嘆願書を皇帝に提示した。しかし、この干渉は凄惨たる結果となった。プリントはマカオで3年間投獄され、その後中国から追放されてしまったのである。外国人は広東以外の港を使用できなくなり、この嘆願に関わった通訳は打ち首にされた。外国人に中国語を教えることは禁止され、それを犯した者は死刑に処せられた。この結果により「広東システム」が整えられ、西洋人を厳しく取り締まる動きも伴って、1842年まで全ての権力は事実上中国の手中に収められるとともに、正式に承認された仲介人以外の現地民との接触は禁じられ、西洋商人は経済的利益と引き換えに、不利な立場に立たざるを得なくなった。多くの宣教師は中国語を巧みに操り、必要な場合は中国語教育の禁止をも免れていたかもしれないが、公的な政策が存在したために、イギリスは中国語の知識を得ることも、中国の文化を学ぶ施設を作ることもできなかった。

「広東システム」は1860年代までに更に発展し、あたかも中国の公文書のように、ヨーロッパの貿易会社による資料が豊富に残されているという点で歴史学者の知るところとなっている (Van Dyke 2005)。広東システムは珠江デルタ周辺の地元官吏と西洋商人の活動をより厳しく管理することを目的として発展したものである。中国にとって、マカオとその周辺の島々から離れた自由海域を行き来する船を管理することは難しく、かつ資金が必要だったため、広大な海域を巡回する代わりに、船が珠江デルタから広東へ入る際に、指定した海路を進ませて管理することが必要だった (Van Dyke 2005)。これは典型的な中国の方式に沿って制定された (Fairbank & Goldman 1998: 195)。中国人商人の氏族は外国人商人の仲介人あるいは監督者となるよう政府から命じられ、全ての外国船は各々の中国人の氏族の会社に対して責任を負うこととなった。この「警備」を担う商人は組織化されていた。一つは Cohong (公行) と呼ばれるもので、こういった貿易の関税の管理者を支配し、もう一つは Hoppo (河伯) と呼ばれるもので、皇帝に直接従うものであった。Cohong と Hoppo は外国の貨物に対応するとともに、管理と課税を行った。その過程は3つの手順に従って行われた。まず外国船がマカオを訪れると、広東まで護衛されて川を上る。次に広東から20kmの距離にある黄浦港で船が止められ、積荷は小さい船に載せられる。最後に外国商社の責任者(積荷監督者)と積荷は黄浦港から広東へ移動するが、船と乗組員は黄浦に置き去りにされた。

18世紀の間にいた積荷監督者は20人足らずであり、その中の僅かな者だけが広東の外国人地区を訪れたが、私貿易が禁止されていたため、訪問は3年に一度だけであった (Li et al 2005; Shi 1986)。18世紀の終わりまで、船の乗組員は冬の間、3ヶ月間黄浦港に残らなければならなかったが、当時黄浦には2000人ほどのイギリス人水夫が他の乗組員と同じように滞在していて、売春や路上での喧嘩などで現地民との接触があったとされる (Bolton 2003: 157; Martino 2003: 51)。早期のCCPの悪名高き文の一つには、ポルトガル語と英語の混合要素が見られるが、それは恐らくこういった環境から発生したのであろう。

“carei glandi hola pickenini hola?”

「背の高い売春婦がいいか、背の低い売春婦がいいか？」（Noble 1762: 240）

19 世紀半ばには、黄浦の中国人の方が広東の中国人よりも英語を上手く話したということが報告されている（Nicol 1822; Williams 1836）。これは、政府の厳しい管理下にあったにも関わらず、裏社会での物品の流通や人身売買とその密輸が西洋人と中国人の間で起こっていたことを示唆している。

2.3. 東西接触の性質

一般に、東西接触の歴史を正しく認識するためには、次のように理解することが重要である。即ち、西洋が南方中国に到着したということは、勇猛果敢な冒険者、利益の上がる取引相手、あるいは優れた知識の伝達者が出現した、ということではない。中国の他民族への対応、特に西洋の異民族への対応は常に明快なものであった。異民族は野蛮人であり、優れた中国の文化を汚す恐れのある要素は港において全力で排除する、という考えであった。中国政府は、15 世紀から異民族の交流を制限し、管理することに力を注いでいた。17 世紀から 18 世紀における東西の関係についての歴史的記述によると、ポルトガルやオランダ、特にイギリスに対して上記のような対応が取られていたことが分かる。

Fairbank（1953）は 19 世紀における東西接触についての歴史的分析の中で、中国的な観点から見ると西洋人は文化的に劣っていた、ということを明らかにしている。

退廃的なマカオの混血児地区はマカオ半島から追いやられていた。広東のファクトリーは外国人が排除されていた都市中心部の外にあり、外国人商人との接触にあたっては特別階級であった買弁、語学者、硬貨鑑定人及び中国人商人が同じような「特別な言葉」を用いて仲介していた。（Fairbank 1953: 13, 「」は引用者による強調）

中国の資料において、西洋人は、「乱暴で高圧的であり、武器を使うことに長けている。髪はボサボサで、眉にかかる長さである」と描写されている（Chen 1939: 347）。西洋の宣教師や冒険家は、15 世紀以来、中国のことを物質的に豊かで、建築物には魅力があり、進んだ科学知識を持った裕福で印象深い国だと記録している（Boxer 1953）。中国人が西洋人に対して見せた優越感については、通訳にして中国の研究者であったトーマス・テイラー・メドーズ（Thomas Taylor Meadows）が 1852 年になした記録が優れている。

中国人は常に西洋人のことを、「無作法で文明化されておらず、道徳的、知的に洗練されていない」という意味を込めて「野蛮人」と認識し、そう呼んでいた。3 億 6000 万人のうち、我々の慣習や文化の一部に直接触れる機会があった 5 つの港の 5000～6000 人程度の中国人は、我々を道徳的に劣る、あるいは自分たちより知的教養のレベルが低いと見なしていた。

そうでなかった中国人との会話は思い出すことができない。驚いたことに、彼らは我々が姓を持つこと、家族の中で父、兄、妻、姉などの区別があることを知って目を丸くしていた。つまり、我々が牛の群れのように暮らしていると思っていたのだ。

長い間存在した、中国における外国人に対する鉄のカーテンを唯一破った西洋人の集団は宣教師、特にイエズス会であったが、彼らも最終的には退けられることになる。この事態は、彼らが 1725 年に異なる宗教的慣例を持つ会派の間で、教皇庁において行われた公的な討論、「典礼論争」で敗れたことによって引き起こされ、中国皇帝がローマ教皇の意向を拒絶した後に、彼らは事実上無力になってしまった (Fairbank 1953: 14)。

中国側のこのような態度の結末として、広東システムにおける中国とイギリスの関係は実際のところ不平等なものであった。Stoller (1979) や Tyron 他 (1996) で論じられていることとは対照的に、この段階におけるイギリスと中国のコミュニケーションは、互いに高いレベルにあったわけではないようである。1842 年のアヘン戦争に至るまで、イギリスとその他の西洋商人は、中国人が外国人に対して持っていた差別的な感情や、言語的、文化的に優位に立っていたポルトガルの存在によって、文化的に劣る者と見なされていた。イギリスは政治的、経済的に不利な立場にあり、中国政府に有利になるよう仕組まれた広東システムにより制限されていたため、相互に利益がある交易ができていたとは到底言えなかった。イギリスや他の外国人商人は、中国が彼らを必要とする以上に中国を必要としていたが、中国にとってアジア諸国との貿易と比べた際に、西洋との貿易で得られる総収入は重要なものではなかった (Fairbank 1953)。実際、このように全体的に不利な立場にあったことが理由で、イギリスはアヘン貿易のような後ろ暗い方法で中国政府に勝負を挑み、それを一連の戦争の初回の口実とし、結果として中国は西洋諸国にとって都合の良い条件の交渉に応じざるを得なくなったのである。この時期にイギリスの立場が弱かったということ踏まえて、もしピジン英語が既に発達し始めていたと仮定するならば、軽蔑され、さほど関心を持たれていなかった相手と交易をしようと躍起になっていたために、西洋人が自分たちの言語を「ピジン化」させていった、という Hall (1944) の主張も頷ける (フィリピン、東南アジア、中央アジア及び日本との貿易は中国にとってイギリスとの貿易より遥かに有益だった)。加えて、イギリスだけでなく、現地民と接触する際に、互いに英語を使っていた他の西洋商人の存在も考えると、ポルトガルの支配を逃れるため、中国人との交流の中で西洋人が英語をピジン化させていった、という主張にも合点がいき、ピジンの多様性の発展において西洋人が重要な役割を果たした、という仮説の信憑性が大きく増す (Hall 1944)。

広東貿易が、アジア訛りのポルトガル語、英語、広東語、そして恐らく公用の中国語 (官話、マンダリンと呼ばれるもの) に言語接触の機会を与えたことは明らかである。マキスタ (Makista) と英語が接触する環境は操舵手と乗組員の交流によって整えられたと言える。外国人居住区に

制限がかけられていたにも関わらず、買弁の存在は英語と広東語の接触における重要な要素であり、その上、彼らは非公式な方法で現地の中国人に西洋商人との接触の機会を与えていた。通訳（語学者）がコミュニケーション上重要な役割を果たしたのは明らかであり、数が少なく、限られた言い方によるものではあったが、中国語、マキスタ及び英語に複雑な接触をもたらしたと思われる。

しかし、広東貿易が唯一の言語接触の場であると考えべきではない。アヘン貿易では大量の密輸が行われていたが、それは西洋商人と現地の通訳、買い付け担当、密売人などを中国の様々な沿岸地域において接触に巻き込んだ（Fairbank 1953）。他の非合法的な商業活動も同じような効果をもたらし、中国人たちもまた違法取引に関わり、結果的に多くの利益を得た。汚職もかなり横行しており、最終的には広東システムの停止にまで至った（Fairbank & Goldman 1998）。

Faraclas 他（2007）で論じられているような、接触の状況を歴史的な観点から考えることの重要性は、東西接触の初期における交流の複雑さによっても明らかであり、彼らの言う「共同生活社会」という概念は、日常生活において生じるごく小さなレベルの接触を考える上で、重要な示唆となる。英語と広東語の接触は起こっていたはずだが、このような接触は18世紀後半まで頻繁に起こっていたわけでも、長期に渡って起こっていたわけでもないことは明らかである。英語とマキスタの接触は表面的かつ短期的であり、稀なものであったろう（これについては Ansaldo 他の近刊論文を参照）。

2.4. CCP の発展と衰退

18世紀から19世紀にかけて、いくつかの政治的、経済的な変化が起こり、それにより貿易は拡大した。第一次アヘン戦争（1839～1842）は中国政府に商業における独占権を放棄させ、イギリスの管理下でアヘン貿易を自由化させることを目的として起こされたが、イギリスは戦争の勝者として、中国側の干渉なしに自由に貿易ができる5つの条約港（広東、厦門、福州、上海、寧波）の開港を迫った。その結果として、香港が大英帝国の一部になり、第二次アヘン戦争（1856～1860）によって生じた更なる譲歩に伴い、西洋貿易は内陸における貿易と同規模にまで中国沿岸に広がっていった。

18世紀後半から、貿易の拡大と、国際社会における重要性の上昇に伴って、東インド会社の役割と機能が高まっていった。これは Bolton（2003）によって論じられた、19世紀初頭の中国南方における英語使用の三つの背景の一つであり、残り二つは限られた地域で活動していた貿易商人とアメリカ人の活動によるものである。このような拡大の結果として、広東の外国人居住区を基盤としたファクトリーの共同体が成長し始め、社会的関係は複雑さを増していった。Martino（2003: 62）は表1に見られるような広東における西洋人と中国人の接触の状況を記述している。

表1. 広東地域における接触 (Martino 2003: 62 より)

ファクトリー			黄浦		
公式の関係	外国人	非公式の関係	公式の関係	外国人	非公式の関係
商人	積荷監督者	使用人	買弁	船員	地元の船員
買弁	通訳	買弁			売春婦
通訳	宣教師	小売商人			その他の地域住民
		苦力			

1836年の広東における英語話者の住民は約200人で、大多数は男性であり、西洋人の女性はマカオに住む傾向があった³。その半分に当たる100名余りがインド系やペルシャ系で、残りは西ヨーロッパ、主にポルトガル系であり、外国人居住区に住んでいた (Morse 1926)。1827年には、外国人社会の拡大を示唆する、英語で書かれた雑誌が初めて登場した。1836～1837年には、CCPの小冊子が中国人住民の間で流通していたことを報告する2つの記事 (Williams 1836) が発表されている。詳しくは次章で述べるが、このような小冊子の存在は、高い水準の教育や中国人社会における教養の有用性と同様に CCP が重要であったことを物語るものである。18世紀の後半、アヘン戦争、あるいはこのような小冊子の普及によって、CCPは中国の他の地方にも伝わるようになった (上海など)。CCPは、異なる言語的背景を持った中国人や、英語を話さない西洋人社会の間でも使用されたようである。

公的には管理がなされていたにも関わらず、この段階において広東の外国人居住区で西洋人と地元中国人との間に交流があったのは明らかである (Hunter 1885)。例えば、ファクトリー内での商人と使用人との交流は、中国語と英語の接触を促したはずである。Selby & Selby (1995) で論じられているように、ファクトリー内での商人とその従業員の関係は多岐に渡った。料理人や清掃人だけでなく、外国人に仕えながら、貿易を通じてその手法を学び、かつ利益を得ることを目的としていた見習いや助手なども存在したはずであり、彼らはしばしば買弁へと成長していった。彼らは名家の出身で教育を受けており、CCP用語集の編纂を命じられた主要人物たちであった。ファクトリーの外でも、小売商や苦力との交流は起こっていたであろう。商業面の強化に伴い、黄浦港では乗組員と現地住民との口語を用いたコミュニケーションが行われ、それにより多言語使用が維持されていたはずである。

CCPは20世紀に入ると衰退し始めた。これは、一般的には宣教師の学校で英語が教育言語として用いられ始めたことの影響であるとされる (Bolton 2003: 191)。しかし、別の要因も考えなければならない。即ち、CCP自体が役割を終えたということである。第一に、東インド会社が活動を停止した結果、1830年頃に広東貿易が衰退したことが挙げられる (Van Dyke 2005: 175)。

³ 1842年にイギリスが香港を支配するまで、マカオにおけるイギリスの存在感はごく小さいものだった (Coates 1966; Tyron, Mühlhäusler, & Baker 1996)。

ただし、それにも関わらず CCP は香港や上海を含む商業都市では依然として話されていた。第二に、特に香港などの中国沿岸地域の状況が、第二次世界大戦や日本の占領によって劇的に変化したことも挙げられる (Mühlhäusler 1996: 518)。日本の占領時代が終わって、第二次世界大戦中に奪われた地域をかつて追放された者たちが取り返した後、20 世紀の間は香港、上海、マカオなどの地域で小売商や家政婦、船乗りたちの中で CCP の存在が確認できた (Mühlhäusler & Baker 1996: 517)。しかし、たとえ CCP の知識が小売商や家政婦の間に残っていたとしても、新たな移住者たちが CCP の知識を持っていなかったために衰退が引き起こされた。第二次世界大戦後に香港は急速に現代的かつ国際的な都市へと変化していった。複雑で変則的な状況にあった広東貿易、異なる教育背景を持った様々な商人による違法な取引、異なるヨーロッパの言語と中国語の交流、そして有能な商人による貿易の仲介が全て終わりを迎えることとなった。1960 年代から、香港の住民は次第に英語と中国語の二言語併用 (二文化共存) をするようになった。新たな移住者のグループが話す英語の変種は、地元の学校で教えられることもあり、ある程度標準的なものであった。このようにして、CCP の培われた土壌はその存在意義とともに消滅したと考えられる。

3. CCP の資料と先行研究

現在知られている、英語で記された CCP の注釈付きフレーズ集は、フィリップ・ベイカー (Philip Baker) が 1980 年代に収集したもので、未刊行ではあるが (詳しくは Baker 1987: 164 を参照)、他の研究者も利用可能で、我々にとっての主な研究資料である。約 15000 語が収録されており、時折付随的な話題、例えば中国人と商売相手もしくは旅行者との出会いを滑稽に描いた話なども収録されている。CCP の使用が拡大していく間に、CCP を教えたり学んだりすることを目的として、中国人が漢字で書いた小冊子も登場した。多くの英語話者の態度とは対照的に、CCP を嘲笑の対象と見なす中国人は現れず、こうした小冊子の刊行は、貿易に必要な言語の習得を通して、対等な関係に立とうとする真剣な目的があったことを示唆している。多くの資料の中で、よく知られているのは次の二つである。第一は『紅毛通用番話』(作者不詳, 1835) で、1840 年代に広東で出版された。第二は『英語集全』(Tong 1862) で、6 巻からなり、これは 1862 年頃に唐廷枢が書き記したものとされる (Leland 1892; Selby & Selby 1995; Williams 1836 も参照)。伝えられるところによれば、CCP は東洋人と西洋人の接触の場面、あるいは西洋人の間で用いられたばかりでなく、異なる言語的背景を持った中国人の間でも使用されたという (Whinnom 1971: 104)。我々は 19 世紀の間、既に言及した中国人商人、貿易商、使用人という 3 種の CCP 使用者に加えて、第 4 の存在をも認めなければならないだろう。

3.1. 『紅毛通用番話』

この題名がつけられた小冊子には 2 つのテキストがあり、互いに僅かに異なるが、いずれも現在は大英図書館に収められている。「紅毛通用番話」とは、文字通り「赤い髪の外国人が話す

言葉」であり、紅毛とは西洋人を指している。早期のテキストはやや乱暴な題名で、外国を意味する「番」の字の代わりに「幽霊、悪魔」を意味する「鬼」の字が用いられている。類似の小冊子はいくつかあり、基本的なマカオ・ポルトガル語の手引きは1750年代に早くも作られていた (Baker 1989: 3)。大英図書館蔵のこの小冊子は、恐らく1835～1850年の間に書かれたもので、本稿で用いる例文はこれによる。全部で16ページあり、数詞、仕事に関わる単語を扱った語彙またはフレーズから構成されている。

この小冊子では、どの語も漢字で書かれており、右下にそれに対応するCCPの発音を漢字で当てている。ここでは2つの語を取り上げる。中国語の訳には、イェール式ローマ字で発音を示し、相当する語はカッコ内に付す。

水	老
手 (séui sáu = sailor)	婆 (lóuh pòh = wife)
些	威
利	父 (wài fuh = wife)
文 (sè leih màhn = sailorman)	

見出し語は約400語で、単語あるいは定型表現を収めている。この小冊子は、語彙と音韻に関しては高い資料的価値を持つが、文法に関してはほとんど記述がない。

『紅毛通用番話』についての分析は多く、Shi (1993) は音韻の対応関係を示し、Baker (1989) では詳細な訳と、音韻対応と共に大部分の見出し語の語源についての見解を示している。372語のイェール式ローマ字表記と、その対象となった英語あるいはピジン語はBolton (2003) の付録にまとめられている。この論文では、脚注の中でスウェーデン語由来の派生語などを含む、資料の来源に関する見解が記されている。Shi (1993) が言及するように、漢字を通してピジンを学習するという事は、一般的なピジンやクレオールが獲得される流れに反することなのである。

3.2. 『英語集全』

1862年頃、より重要な資料が登場した (Selby & Selby 1995: 123)。作者はTong King-Sing (唐景星) であるが、Tong Ting-Ku や Tang Tingshu としても知られている。唐はその当時、言語学的知識に富んだ、熟練の英語話者であった。彼は6巻からなる *Chinese-English Instructor* (『英語集全』) を著したが、これは中国語話者に標準的な英語を理解させようと試みたものであった。6巻それぞれが異なるテーマを扱っており、第4巻と第6巻では単語とフレーズに加えて、会話中のより高度な文や定型句を中心に扱っている。その言語学的価値に加えて、会話の断片から当時の商人たちの日常生活について窺うことができることも興味深い。英語の発音がそれに近い音を持つ漢字によって示されているだけでなく、補助記号も使われており、中国語以外の言

語を書き留めるための手法と見ることができる (Selby & Selby 1995: 125)。

この書では、どの見出し語も 4 つの要素から構成されている。右下には英語、左下には漢字で示された英語の発音がある。英語の発音を広東語の範囲で示すことにはかなりの困難を伴うが、広東語にはない歯間摩擦音を小さな三角形で示す、といった方法を唐は考案した。左上には中国語、右上には相当する広東語の発音をローマ字で記したものがある。

しかし、CCP の研究において最も興味を引くものは手書きの注である。それはピジンの特徴を持ち、唐によれば、「廣東番話」，“Canton foreign language” と呼ばれるものである。

見出し語の一つを分析すると以下のようになる。

How many dollars is that

咁申得幾多員呢

(gam sàk dák géi dò yùhn né)

口乜治打鐳

(háu màt jih dá làh)

CCP: how muchee dollar

『英語集全』についてはまだ研究されるべき特徴が残っており、更なる分析が待たれる。例えば、ローマ字表記の広東語は、150 年間にわたる広東語の音韻変化を考える上での重要な資料である。CCP の注に関しては、Li 他 (2005) が研究の先駆けであり、予備的研究として全ての見出し語を収集している (Ansaldo の近刊論文, Ansaldo 他 2009 も参照)。そこでは全部で 1000 以上もの CCP の見出し語が収録されている。これは約 5000 語に及ぶ、現存する中では最も大規模で信頼できる CCP の語彙集である⁴。それぞれの表現は手書きの注から収集したもので、次の 4 つの情報を抜き出している。

1. 標準的な英語の文 (左上)。
2. ピジンのフレーズに相当する漢字 (右上)。
3. イェール式ローマ字表記による広東語音 (右下)。
4. 英語の正書法で表記されたピジン (左下)。

見出し語の例は表 2 の通り。

⁴ Leland (1892) も規模の面では同等だが、著者は中国を訪れたことがないようであり、信頼できる資料とはいえない (Selby & Selby 1995: 123)。

表 2. CCP 語彙集の構成 (Li 他 2005)

p.32	
It is a bad thing to go to law	哥羅必剪威黎必
go law pidgin velly bad	gò lòn bit jín wài làih bit

これは非常に価値のある資料であるが、なお多くの疑問が残されている。例えば、注を書き加えたのは唐自身なのか、あるいは他の誰かなのかははっきりしていないことなどであるが、より重要なのは、当時話されていた言葉をどの程度反映しているのかが分からない、ということである。広東語音を用いた推定音が、漢字を用いて表した実際の発音にどれほど近いのかも不明瞭である。いずれにせよ、もし CCP の研究を恐竜の研究に例えるならば (Selby & Selby 1995: 113), 『英語集全』の解説は完全な骨格を発掘しようとするようなものであろう。

この資料は何と貴重なものであろうか。我々は英語の口語体、広東語における相当語と共に、優れた言語学者による大量のピジンの記録を手に入れたのである (Selby & Selby 1995: 125)。

『英語集全』の番話 (fānwáa) の記述は、ピジン・クレオール研究において、唯一にして最大の中国ピジン英語の資料となるだろう (Bolton 2003: 176)。

『紅毛通用番話』が主に語彙を収録したものであるのに対し、『英語集全』にはより多岐にわたる商業目的の会話が記述されている。例えば訴訟、茶の販売、船の貸し借りなどである。即ち、我々は流暢な中国人バイリンガルが話す CCP の文法に関する豊富な知識を得たことになる。

3.3. これまでの CCP に関する見解

一般に、CCP における文法の起源については、次の 2 つの異なる見解が認められる。(1) 複数の CCP の特徴は中国語、特に広東語の文法に遡ることができる (Bisang 1985; Selby & Selby 1995; Shi 1986, 1991)。(2) CCP は中国語の影響をほとんど示さず、「普遍的ピジン化」が認められる (Baker & Mühlhäusler 1990; Tryon 他 1996)。しかしながら、中国語と英語双方の影響が見受けられるのは、これまで発見された CCP、特に中国人の著者による小冊子と、西洋文学に見られるような英語話者が話す CCP との間に存在する違いによるものと考えられる。加えて、ピジン化によって屈折が失われると仮定すると、中国語の文法に起因する孤立語的特徴の移行と見分けがつかなくなる (Ansaldo 2007)。さらに関連する問題として、CCP 発生の媒介に関する問題がある。Hall (1944) では、CCP はフォーリナートークの産物であるとする一方、Baker & Mühlhäusler (1990) によると、「高度」な文化同士の接触の結果によるもので、「拡張した」状態の中で安定しているという。ただし、この主張は次の 2 つの考察に基づいて懐疑的に見られている。(1) 一般的に、西洋商人は中国人の目には高度な文化を持った存在だとは映っておら

ず、大部分は軽蔑されていた（Chen 1939; Fairbank 1953）。(2) 複数の資料から、CCP の中にも有意な変種があることが分かっている（Bolton 2003: 161; Shi 1991）。

（以下次号）

参考文献

- Ansaldò, Umberto. 2007. Review of McWhorter, John, 2005, *Defining Creole*. Oxford University Press. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 22 (1). 170-176.
- Anonymous.c.1835. 紅毛通用番話 (hùhng mòuh tùng yuhng fàn wá --- *The common language of the Red-haired Foreigners*). Guangzhou.
- Ansaldò, Umberto 2009. *Contact languages: Ecology and evolution in Asia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ansaldò, Umberto & Matthews, Stephen. 2004. The origins of Macanese reduplication. In Genevieve Escure & Armin Schwegler (eds.), *Creoles, contact and language change: Linguistic and social implications*, 1-19. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ansaldò, Umberto, Matthews, Stephen & Smith, Geoff. Forthcoming. The Cantonese substrate in China Coast Pidgin. In Claire Lefebvre (ed.), *Substrate influences in Creole languages*.
- Baker, Philip & Mühlhäusler, Peter. 1990. From business to pidgin. *Journal of Asian Pacific Communication* 1 (1). 87-115.
- Bisang, Walter. 1985. *Das chinesische Pidgin Pidgin-English*. Zürich: Universität Zürich.
- Bolton, Kingsley. 2003. *Chinese Englishes: A sociolinguistic history*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Boxer, Charles R. 1973. *The Portuguese seaborne empire*. Hammondsworth: Pelican.
- Chen, Ta. 1939. *Emigrant communities in South China: A study of overseas migration and its influence on standards of living and social change*. Shanghai: Kelly & Walsh Ltd.
- Fairbank, John K. 1953. *Trade and diplomacy on the China Coast: The opening of the treaty ports, 1842-1854*. Stanford: Stanford University Press.
- Fairbank, John K. & Goldman, Merle. 1998. *China: A new history. Enlarged edition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Faraclas, Nicolas, Corum, Micah, Arrindell, Rhoda & Pierre, Jean O. 2007. *Sociétés de cohabitation and the similarities between the English-lexifier Creoles of the Atlantic and the Pacific: The case for diffusion from the Afro-Atlantic to the Pacific*. Paper presented at the 24th Meeting of the Society for Pidgin and Creole Linguistic.
- Gunn, Geoffrey C. 1996. *Encountering Macau: A Portuguese city-state on the periphery of China, 1557-1999*. Boulder, CO: Westview.
- Hall, Robert A.J. 1944. Chinese Pidgin English grammar and texts. *Journal of the American Oriental Society* 64. 95-113.
- Hunter, William C. 1885. *Bits of old China*. London: Kegan, Paul, Trench and Co.
- Leland, Charles. 1892. *Pidgin English sing-song*. London: Kegan Paul.
- Li, Michelle, Matthews, Stephen & Smith, Geoff P. 2005. Pidgin English texts from the *Chinese-English Instructor*. *Hong Kong Journal of Applied Linguistics* 10 (1). 79-168.
- Martino, Elena. 2003. *Chinese pidgin English: Genesi ed evoluzione* [Chinese Pidgin English: Genesis and evolution]. Tesi di Laurea. La Sapienza, Roma.
- MorriSon, Robert. 1807-8. Unpublished journal in Council for World Mission archives,

- SouthChina—Journals, Box 1.
- Morse, Hosea B. 1926. *The chronicles of the East India Company trading to China 1635-1834*. 5 vols. Oxford: Clarendon Press.
- Mundy, Peter 1637. *Itinerarium Mundii* [The travels of Peter Mundy]. Edited by R.C. Temple as *The Travels of Peter Mundy, in Europe and Asia, 1608-1667*, volume 3 (1919). Cambridge: Hakluyt Society.
- Nicol, John. 1822. *The life and adventures of John Nicol*. Edinburgh: William Blackwood.
- Noble, Charles F. 1762. *A voyage to the East Indies in 1747 and 1748*. London: Becket and Dehondt.
- Paviot, Jacques. 2005. Trade between Portugal and the Southern Netherlands in the 16th century In Ernst van Veen & Leonard Blussé (eds.), *Rivalry and conflict: European traders and Asian trading networks in the 16th and 17th centuries*, 24-34. Leiden: CNWS publications.
- Reinecke, John E. 1937. *Marginal languages: A sociological survey of the creole languages and trade jargons*. Yale University, Ann Arbor UMI.
- Selby, Anne & Selby, Stephen. 1995. Chma Coast Pidgin English. *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society* 35. 113-141.
- Shi, Ding Xu 1986. *Chinese Pidgin English: Its origin and linguistic features*. M.A. University of Pittsburgh.
- Shi, Ding Xu. 1991. Chinese Pidgin English: Its origin and linguistic features. *Journal of Chinese Linguistics* 19 (1). 1-40.
- Shi, Ding Xu. 1993. Learning Chinese Pidgin English through Chinese characters. In Francis Byrne & John Holm (eds.), *Atlantic meets Pacific: A global view of pidginization and creolization*, 459-464. Amsterdam: John Benjamins.
- Siegel, Jeff 1990. Pidgin English in Nauru. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 5 (2). 157-186.
- Soothill, William E. 1925. *China and the West: A sketch of their intercourse*. Oxford: Oxford University Press.
- Stoller, Paul 1979. Social interaction and the development of stabilised pidgins. In Ian F. Hancock (ed.), *Readings in creole studies*, 69-72. Ghent: Story-Scientia.
- Tamburello, Adolfo. 1983. La cultura occidentale nel Giappone Tokugawa, la mediazione olandese e russa nel 1800 [Western culture in Tokugawa Japan, Dutch and Russian mediation in 1800]. *Il Giappone* 21. 5-23.
- Tong, King-Sing. 1862. *The Chinese and English Instructor*, 6 vols. Guangzhou.
- Tryon, Darrel, Mühlhäusler, Peter & Baker, Philip. 1996. English-derived contact languages in the Pacific in the 19th century (excluding Australia). In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler & Darrel Tryon (eds.), *Atlas of Languages of intercultural communication in the Pacific, Asia and the Americas*, 471-495. New York: Mouton de Gruyter.
- Van Dyke, Paul A. 2005. *The Canton trade: Life and enterprise on the China coast, 1700-1845*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Whinnom, Keith. 1971. Linguistic hybridization and the 'special case' of pidgins and creoles. In Dell Hymes (ed.), *Pidginization and creolization of languages*, 91-115. Cambridge: Cambridge University Press.
- Williams, Samuel W 1836. Jargon spoken at Canton. *Chinese Repository* 4. 428-435.